古今集遠境

五

911.13
M893
k

題しらず　よみ人しらず

みちのくのしのぶもぢずりたれゆえにみだれそめにしわれならなくに

○上 カワ〳〵ニチヨウトカウヲタバカリノ人ヲ コレカライツマデモ恋シウ思ウテ月日ヲタテルヿデアラウカイ

○一度モ逢タヿガナクバ　ムヤウニ恋シイコモアルマイ　アフタヿガナクバ　タヾヨソノヿニサヘテ居ルバカリデサヘアラウニト思ハルヽ

国立国会図書館 25.3.31
112443

はるかに海の中を中くふかくこぎ出でゝ、はるばるとおもひやる

○一二 十二月三日京を立ちてかすがの社やうに京ライトハ見ハウカイ山ヤウハ見フマイニ

京ゆきゆき

思しいへどこゝに住みなれてはるの先づしぎれくるゆるあ京

○富士ノ山ノモエルノハシキウデウノコデメヅラシイコモナイガワシモオマヘノコ

トサイヘバ雪デモアハイデモ イツデモフジノ山ノヤウニ京ノ見ヒガモエママ

伊勢

夕ふぐふる西しハ人てしじ知るくヒグ面新ふとづゝ分あれば

○ワシヤモウ見フ人ノ義ニモ見エルトハ人ラレマイヅ 新ゝ淺ヲ人ルニモ

キツウヤツレタオモカゲデ ハヅカシイ身デヤニヨウテサ

ゆくゆくふる新ふ波を人ふ加くこそ分るのうぞもあるル

○一二 ドウゾ又ヒツカヘシテ来テ氏色リニサアハウワイ サテモ

マアノコリオホイーカナ

いせのあるは新なり上新ふうぐくてみゝ先ふ人をいくはしもゞる

○上 ドウゾ〳〵見フ人ニ存分ニハラ一ハイ 達ハレルヤウニシタイコカナ

新なるタるハ新合の菜タ合の菜し魚新をもなしてタ菜と

回ゝ人此ふゝの新なるタあとゝで新タのゝ人ゝハむゞゝで

やゝとのり

そ歳ふれ新ぐゝ山のさゝゝ示それどもいりねそゝもいりかる

○霞ノタナビイテアル山ノ桜ノ花ヲ見ルヤウデ 見テモ〳〵飽テモ〳〵
サテモサテアカヌ君ヂヤナカナ
ぬりやまぢ

こゝろでこゝろなぐさめかねし思ひぬる見るものうしや恋しかるべき
○心ト云モノハ ムリナヿヲ思フ物ヂヤトナ思ハレル カウシテ居テ居ナガラ
モヤツハリ悲シイワイ 居テ居ナガラ悲シカラウハズカイ 居テ居
テハ悲シカラウハズハナイニ
九河内こつ子

かさねてむ後をバおもふで夜半はふく〳〵のおりやゆかる
○夜シゲル草モ 冬ハ枯ラズ枯レルモノヂヤガ ワシガ思フ人モ今コソアレ
後ニハカレテ来ヌノイテシマウデアラウニ サウ云フヿヲバガテンセズニ 扨モ〳〵
夜半ノヤウニ深ウ思ハレルコトカナ
よみ人しらず

飛鳥川ふちハ瀬ニなるよなりとも思ひそめてし人ハかはらじ
○アスカ川ハ淵瀬ガヨウカハルト云フヿデ 世ノ中ノ人ノ心モソンナ物ヂヤト云フヿヂヤガ夫ト
ヒトツヤウナ世中ヂヤトテモ ワシハ一タビ思ヒソメテアラウ人ヲバイツマデモ忘レハスマイ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふことの葉のみや秋をへて色もかはらぬものにはありける
○フウタイ木デモ草デモ 秋ハ色ガカハル物ヂヤガ 秋ヲコシテモ 色ノカハラ
ヌ物ハ ワシガオマヘヲ思フト云フ此詞バカリデカナアラウ 但ハカハルトテモ
此ワシガ詞バツカリハカハリハセヌゾヱ
よみ人しらず

野しらび

いもしらふ衣かすかに花さくひりやあ[illegible]ひ[illegible]の梢昨

○今夜モ 芋ヲトイテ フトンノ上ヘキルモノヽ片一方ヲ表テ 表ヲ待テ
居ルデカナアラウ 宇治ノ梢昨ガサ おけさ〜昨の流いろ

又きうしづけ 月アひめ

きやこむ函やゆうむのいさひふ高木の板ヲもきび神よりて

○君ガクルデアラウカワシガ行ウカト シバラク食テ居ルデ アモサズニネタワイ

そきんゐ〜

今きむ〜ひ〜じ〜ハ月は有明の月ばかりでつる瓜

○オツケソヘ ホラウト云テオコシタバッカリニ 九月ノ末ノ夜ノ長イニ サテマツ

ホドニマツホドニ オソイホドニ月ガハヤモウ出タワイ 約束モセナンダ有明月
廿待ダシタニ ソレニサ待ツ人ハ 却モ〜ヌイカナ コレハマアドウシタイ

よみ人しらず

月花ゆえ花とも人ふたぎやらぐこて花なりきびとあるで

○今夜ハキツリ月ガヨウゴザル 月カヨウゴザルト人ノ云ヘシラセテヤッタラソレデハ
チトゴザレト云テヤルモ同シヤウナモノヂヤ ドヤシラセテヤラウ オレモアセリ
ヨイ月ヂヤニヨッテ モシワセモセウカト 五 ヨタヌデモナイニ

月花ゆえ〜ハ月花ゆえ〜月花ゆえ〜ハ泡なりとそぶ

きうりあ 東屋はものこそあれ同じ梢ぬて東屋の東屋の

とかうまうりこそハこそよりこそ河びこそとぞいハ

まんをごしのこじうる待やし。まてくは恋し流れみる流れゆきて。
君こそば秘密へとりしじこむしきれさうなゆひに君は如くとと

○君ガコズバ イツマデモ閨ヘモハイルマイ カウシテ外ニ立テ井テ髪ヘ露ガオクト云テモ イトヒハセヌ ヤツハリコヽデ待テ居ヤウ

宮城野はなけしの小萩がもとをおもく風をまつごと君をまちて

○宮城野ノ本アラノ小萩ノ露ガ重サニ風ノフイテクルノヲ待ッヤウニサワシハ君ヲマツワイノ

なけしハなぶちはたちまちしれ。あつくせつるしきるあふなびきやるとしてはにおはれまだしれぬしく萩のごとに茂小はらるなのおのれ小も本萩みハけしして。又小をつきてり伺のことまでしちひきれをりふもけしん。

あな恋し今も見てしか山がつのかきほに咲るやまとなでしこ

○アヽ恋シイ ドウゾ今モ見タイモノヂヤ 山中ノ家ノ垣ニヨウ咲テアルアノヤマトナデシコノヤウナカアイラシイツノコニサ

はのおめあふれ思ひども山しろのとはふ見えむひあふけのことて

○一 何ヲモホカノヿハ思ヒハセヌ タヾ逢タイノヽトバッカリヲサ 三 ジヤウヂウワシヤ思フテ居ルワイ

とんふはおひるむへられるふはあぶれどいふ

思ふことゑこそ上の思ハそこひてをとドへ郭ぐるせて思すとりすることとあせよう。

たしゆれ

恋しきはやまゆきおはほしぬらしれこそもへてしてはよいうる

○上 ドウゾ アヒナシニ又アウヤウニシタイヿヂヤ

112443

ぬりやぶ

○ゑしイナドゝ云名ハ タレガツケタイギヤヤラ ソシテマハリドホイ名ヲイハウヨリハナニカナシニ 死ヌルトサ スグニゑタガヨイワイ キツウゑシウ足フトキニハ実ニ死ヌルヤウナワサテ

みゝせの大川のゝ乃友ちゝ乃めふ足づわがらひめやも

○上 一ドホリ云ヲイナラワ劣サヤウニコヒシタハウカイ 一ト云ノイデハナイワイノかゝひて拘ハ物も足ひふさむのうらぞ居さゝかりけふ

○サイショカラサ 後ニハ此ヤウニゑシカラウ ねギヤトハ ワシモ足フタイギヤ

サイショノワシガ心ノウラナヒガヨウ合タワイナ

天の原ふりさけ見れば月も出でさゝもの人は

○神ナリト云物ハ ヨニオソロシイ イヅンデモタマラヌケシカラヌイキホヒナ物デヤケレド ソレデモ人ノ足ヒアウタ中ヲバトホノケルモノカイ ソシテ非ナリサヘトホノケバヤヌイナレバ タトヒイヅクガアツタトテモノクイデハナイワシヤ

棹ちひさ舟の漕ぐら未つひふヨビ男子人よ高ちの志ぎくむ

○一二 未デハドウデ シガヒヤウニ足フ人ニ名ガ立テイロ〳〵トウワサガシゲウナルデアラウ

けふこゝに人あるとはみやこのあふみぢの海

へなりひろこゝ物むしん

夏引の手びきの糸をくりかへし事しげくとも絶むとおもふな

○タトヒ世間ノウワサハドノヤウニシゲウゴザリマセウトモ 二 三イツデモワタシヲ絶(キラ)ウトハ思召テ下サリマスナ

くりかへしとは。ひさしくつゞきて。たえまなきことをいへるなるべし。

此歌ハ久しかよみてなりけるとあむ

里人乃ことは夏野のしげくともかれゆく君に逢はざらめやは

○人ノウワサヲバカツテ 四君ハトホノイテイクガ 一在所デノウワサハタトヒ夏ノ野ノ草ホドシゲクトモ オレガ逢ハズニ居ヤウカ コレカラトテモアハズニハオクマイ

藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける女をあひしりて文つかはせりけることばに今まうでく(オツヽケ参リマスガ)雨のふ(アメフリマスヲ)りけるをなむ見わづらひ侍る(デカケニクヽ、マヅシバラク見合セ居マス)といへりけるを聞きて女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

かずかずに思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

○ワタシガ事ヲ 一シンセツニ思召テ下サルヤラ 二サウモナイヤラ(おもひもせで) ソコノホドハドウモ 三キヽタヾシガタサニ コヨヒノ雨デソレヲ考ヘテ見ル ソレデワシガ身ノ仕合セ不仕合セモシレルヂヤガ 四ソノ雨ハサ此ヤウニ 五降ヽ、大ブリニナリマス コレデワシガ不仕合セモシレタヂヤワイナ 此雨デワシガ身ノ仕合不仕合ヲ知ルト申スワケハ 一タヾ今ノ此方ノ通リナレバ此雨ガ止ンダナラ此方ガアラウシ ヤッハリフッタラ此方ハアルマイヂヤ スレヤ此雨ハワシガ身ノ仕合

不仕合ノシレル雨ヂヤワサテ　うきくふしの宿諸縁みる
あさしびとは俗云ふ縁切といふ事わすれずまずおもくしては御
の身をうらみたるさてちかうに（式）敷意ハよむひともつきじころなく
恋の敵あはれさずしれつつふよとし又思ひのあだきよしといふ事多き
あだきハ恋る心の深く切なるをそうこれそかなしくふをもさむれど
その身をも世間をもあきらむるなどもはばかる考へ合せて然し

ある女のなりひらの朝臣を　ところさだめずありき
すと思ひてよみて遣しける　よみ人しらず

大ぬさのひくてあまたになりぬれば思へどえこそたのまざりけれ

○後ノ句ニ大麻ヲアマタノ人ガ手ニ引ヤウニ　オマヘハ近イコロハ方々カラヒツハル
所ガ多ウナツタレバ　思ヒハスルケレド　ワレハドウモオマヘヲ頼ミニハサ　エイタサヌワイナ

かへし　なりひらの朝臣

おほぬさと名にこそたてれ流れてもつひによるせはありてふものを

○サアワシハソノヤウニ人ガ多イ大ヌサヂヤト　名ニコソタテラレタレ　されど大麻
ハ川ヘ流レテハユクケレド　ドコゾデハ流レテヨル所ノ瀬ハアルトイフノニ　アンマリ
其ヤウニ大ヌサヂヤ／＼トイフテ下サルナ　ワレヂヤトテ末デハドウデヨル
所ガナウテハサ　ソノヨル所ハオマヘヨリ外ニアロカイノ

題しらず　よみ人しらず

須まのあまのしほやく煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり

○スマノ浦ノアマノ塩ヲヤク煙ガ風ノツヨサニワキノ方ヘナビイテイクヤウニ

ワレガ見フ人モ　見ヒモヨラヌ人ノ方ヘナビイテイタワイノ

玉かづら来ようふるみりぬまどだえぬんのうれしぶもし

○オマヘハテウド　カヅラノアノ木ヘモ木ヘモハヒカヽルヤウニ　アチコチト

オカヨ　ヒナサルカガ方ヽニテケタレバ　ワレガカラタエハナサライデモ　ソノ

タエヌ心ガナシノウレシイコトモナイ

あづちとたらづまとてうの新たでおりとかゆるうとうする

○夜中ニアレ郭ヲガツイコヽデサ　ウ声ガスル　イツモトヽル里ハ　ドコノ里カシラ

ヌガ其里ヲバ今夜ハドヽルノヲ一夜嬉シテ　メツラシイコチヽヲテ嬉タトミエル

アソコデ子テ井テウ声ギヤ　ふれいで新たのうのうとうふ入うる

そ、張ろうべし、意のたうとしてハ祝うるまうするというるあや。

ゆすがづ〳〵絶うるの代高のうふ作しうい公ひとく蓑あ、

万緑よハうるれ命とし古恋ふ新たのうしとうと

いで人をたとしのづでよれ月草けうつしうそ色あしふして

○イヤモウ人ト云モノハロバッカリナ物ギヤ　三ウツリヤスイ心ハロトハキツイチガヒデサ

いうとうとハ月きよ月りせバ心ちびうり人のうは物ふうれしかうしし

○誰デモ略デハ嬉シイコトヲ云テクレルケレド　皆ウソデ子カラ私ニハナラヌカ　ソウ云

コトヽセイ世中デアラウナラ人ノ云テクレルコトガドレホドウレシイコトデアラウゾ

月たうとうとうとの〳〵今きとふふぬがとをうとうれうとうのきむ

○ウソギヤガトハ見ヒナガラモ　コレデ私ニ豆フテ居ル人ノ云ヒナレヤ　ワレヤヤウ

ハリフヲ私ニ見フテ居ルワイノ　タトヒ外ニコトナ人カアッタトテモ　今サラ心ヲ

ウツシテ　誰ヲ形ニハセウゾイノ　ワシヤトウトサウ云心ハナイ

素性法師

秋風ふくころとなるとのうつろへば人の心もいろぐとぞおもふ

○此ゴロノ秋ノ風ニ山ノ木ノ葉ノ色ガカハツテチウテイクヲ人ノ心モドウアラウヅ　カハリハスマイカトサキヅカヒニ見ハル、

宗祇

はきさいの花は色々なれども　かゝるものかは

○ハギノ花ノ声ヲキケバ　モウオ〻ケ秋ガ近イト思ヘハ　形ニ見フ人ノ心モ秋風ガ立テ　心ザシガ　ムスヒ〻ト変ノ衣ノヤウニウスウナルデアラウカト思フノテ　悲シイワイノ　餘材流　おもりてぐくし　変衣といてハ　ハギの花の紙とかゝて

うつろへハよの人〻ぐの恋ぐ見バ　ようく人〻ぞ

○一　世ノ人〻ウワサガシゲンバ　ワシヲ忘レハセヌナガラ　オノヅカラトヲノクノデアラウト思ハル、　又人ヲ忘レハセヌナガラ　オノヅカラトヲノクノデアラウト思ハル、

あるでこそ思ひむ中ハ　なほ物思ひ見ぬ後のこそ　ぐこそふ

○思フ中ナラ　タカヒニアキノコヌ内ニサハナレデシテウ　ドウシテモ久シウナレバ　アキノクルナラヒナレバ　ゼメテ今ハタガヒニアカヌトコロナリ　後ノ思ヒ　ダシグサニシテサ　ハヤアキガキテカラハナレテハ　ウシニモ思ヒダシグサモナイ

ワサテ　餘材　ぐこそれぐこそみの流ぐ

ヨモヤ秋ヲ待シ思ヒ人ノつくゝふるゝ夕ぐれかな

○コチノ思ヒヤウニモナイ人ヲ思フテ山ヤウニ心ヲ苦シメウヨリハワスレテシマウゾト思ヘバ又ドウヤラ心ボソウナツテ今マデヨリハ打キツウ出イ　ニサウ思フ心ガ付カラシテハヤマアヤマヤウニカナシウテハトテモ忘テシマハルヽデハナイ。よ秋ヒとりゴハニの白へ住くべし。

秋ヲ色形ムしあをとうゝむらお新ら人の秋ゝハなもむとゝをゞ

○忘テシマハウト思フガ必ズオレヲ恨ムナヨ　新公ノ秋ニナラヌサキニ早ウドコヘカインデシマウヤウニ　オレモ人ノ秋風ニハアハウトハ思ハヌ。よ秋ヒニの白ゝゝゝ切て、三の白ハ下へつけてよむべし。

あえどゆく恋をの門ハよどみなばむありとや人のおりゝむ

○タエズ流テウヒニヨドデダニノナイ山恋ヲ門ノヨドニダヤウニオレガモシタヽクサレツカヘデモアウテ恋ハヌコガアウタラナゴ心ニテノアルヤウニカノ人ガ思ウデカナアラウ

ロの白一本ふくあるとやしうふつきて田中そまろぶくあるこやのこゝ所よおちらるあゝむしらいつゝまゝにたきゝくゝ山ゝうゝきを

ゞこ所ゝ色ハ必ずゝゝ万葉のあ所ハ倒ゝ出ゝ流ゝゝやそハ後ゝそのうゝゞ。

いなうゝくゝのいそくゝ形ゝとゝよゝわづゝ月ゝくゝゞらゝ

清川のよどむしゝくゝハこゝろゝゝめゝゞ流ゝてしふゝ紅ゝうゝあゝふゝものを

○山ノ月ワレガエイカヌヲ　川ノヨドニダヤウニ　ナゾトゞコホリガアルトモフデアラウケレ尼　ワレヤ　末ウイツヤデモトモフ原イ心ヂヤモノナノトゞコホリガアロゾイ

恋性法師

そこひなき淵やそちらぐゝ山川の浅きせふこそ行ゞ流ゝて

○山川浅イ　流コソザワくトハタツモノナレ　底ノナイヤウナ深イ淵ガサワグ物カ

ゆイ関ハケダシクサウギハセヌ テウドソンナモノデ シンジツニゆウヒフ人ハ呼ベダシテ
何シトモイヒハセヌ シンジツラシウナノカトゝ云ハ ソレヤ多ク心ノ儀イアダ信ヂヤ

とゝ人ちゝ迄

○ 一二 サイショカラゆウヒヒフメタ心ヲ ドンナコガアツタトテ忘レウカ
ワレヤ イツマデモワスレルコデハナイ

かゝれた人

みちのくれたのぶりぢでもし沈ゆ名ふみ
○ 一二 タレユエニ外ヘ心ヲチラサウグ オマヘヨリ外ニ心ヲチラスワレヂヤナイグエ
ちすぢもぢもぢの流れ所ぢちし おすまろ

人ちゝ沢

思ふらしいふをよとう紅風ふ形び〳〵淺葉れ色ゐ〳〵ふ神名
○ワシハコレホドニゆウヒフニマダハウヘヲドウゼイトネテデ 三四 人ハ心ガ
ハリノレタイグ コレホドニヒフハウヘハモウドウモシヤウガナイ
ちゞのいろふちちちあじ活 ちゝちふ〳〵秋の初紫ろ〳〵よそ
○人心ハアチヤコチヤイロ〳〵ニウツルデアラウケレド 心ハ紅葉ノヤウニ色ノ見
エル物デハナケレバ ウツロウノガレヌ 皆枝紅の流ろし おすまろ

小町

いろ〳〵ちゝ里のちゝぶあ〳〵形〳〵ふ〳〵らみむとこの〳〵人のいゝむ
○あセノアマノスム里ノ業内者ニコフ浦ヲ人ヤウトハネハウハズノコナレワシハ

ソンナ浦ノ業内者デモナイニ　ドウスルコデ　ウラミヲ　ウケウラミヲ
云ウトバツカリヒタモノ人ノイフ「ヤラ

ちとつけをもて

○空ノクモツタヨ日ニハ　人ノ影ノ有テモアエヌヤウナモノデ　ソレト目ニアエエコソ
せず　ワレハ云ニヤセホソウテ　ひヤウニ影ノヤウニナルホド　ヒラ「ナレバ
人ノ影ノ身ヲハナレヌヤウニ　心ハジヤウ　チウ　思フ人ノ身ヲハナレハセヌ

ちゆよ

○色ノアル物ナラバコソ　ウツロウテカハリモセウナレ　人心ハ色ハナイモノナレバ

ソノ色モナイワレガ心ガカノ人ニ　シミコンダカラハイツマデモカハラウトハ思ハレヌ

一

みくらべ

○久シウアハヌメヅラシイ人ニアハウトテヤラン　サウシモセヌノニ　ワレガト紐ガ
コノゴロハ度〳〵ヨウトケル　○千秋ハ譯ハサウシモセヌノニ　ワレガト紐ハ
即ト紐ときもせぬかと　ツヽしむ

かげろふ

○一　サウカサウデハナイカ　モウスレワスレタクラ井ヂヤ　サテモく　三　久シウ
アハナンダ人ヲスルニバ　イゼンヽヽガ思ヒグサレテ　後ガサコボレル　世の中ハ
又別ナホウ人ヲこそ　ばしうるぞよ　○千秋ハ集のうれ〳〵みとなホ
ほうえあぐるあるしをぶ　○こぎくりはしくもや　えこうちむ

○堀江ヲ漕来スル小舟ノイク度モ同シ川筋ヲノボリクダリスルヤウニ ワシハ マヘ方ノ同シ人ヲ 又タチモドリ〳〵 ムヤウテイツマデコヒシタウヿヤラ

伊勢

わたつみとあれにし床を今さらにはらはゞ袖や泡とうきなむ

○ワシガ床ハ 久シウ寄絶テ思フ人ト寝タヿモナイニヨツテ カナシサニ涙ハ 海ノヤウデ 其海ノアレルヤウニアレテシマウタ床ヂヤニ 久シブリデ又今サラ 思フ人ニ逢ウチヤトテ ツノ床ノツモツタ塵ヲ 袖デハラウタナラ 涙ノ沫ノ ウクヤウニ ワシガ袖ガ涙ニウクデカナアラウ

つらゆき

いにしへに猶立かへる心かな恋しきことにもの忘れせで

○今デモヤツパリ昔ニ立カヘツテ マヘ方ノ人ガ恋シイ サテモ〳〵物ワスレセヌ心カナ ドウゾムカシヤウニ恋シイヿニ物ワスレヲシテ マヘ方ノ人ノヿヲバドウゾ忘レテシマハイデ

人をしのびにあひしりてあひがたくありければその家のあたりをまかりありきけるをりに雁のなくをききてよみてつかはしける　大とものくろぬし

思ひ出て恋しき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや

○思ヒダシテ恋シイ時ハ アノ雁ノ鳴テワタルヤウニ 我モ此トホリニ此門ヲ泣テトホルトヿヲ 此家ノ内ノ思フ人ハ知ツカヤ カウヂヤトハシリハスマイ

右のおほいまうち君（モウ来ハスマイヤウニナッタレバ）すまずなりにければかのむかしおこせたりける文どもをとりあつめてかへすとて

よみくおろうの

典侍藤原ふるかの朝臣

白の色ハ　いとゝ染今ハ　てむ　身ハ　ものを　ばかりきとゝろるし

○コレマデイロ〳〵ト末形モシサウニオツキツテトサレタ所ドモ　モウハ

モドシヤシマセウヲ　ワタシガ身ガ此ヤウニアカレテシマウタレバ　今デ

ハモウサヤウナ所ナドハ　此方ニハオキドコロガゴザリマセヌ

ぬるもばそ　ふるさとれば　ふりぬるもバ〳〵ハ　哭く

かるし

近院　右のおとゝいまうち天

今ハとてうへそこのそ　ひおきておのゞ　ぬ〳〵　形ゑんどやうむ

○モウハトカテカヘシテオコサレタ　此ヤウヲ　ヒロウテトツテオイテ　モト

自分ノ物ナガラモ　ソナタノ形見ギヤト思フテ　ハ〻セウカイ

よ陰の中納言

出ぼそのそとハつゆもまどハるむ人をとゝとあらと思ふむ

○オ〻ヘハ今デハ　毎夜ハ色ヒナサル所ガ外ニアルギヤガ　タ〻く今夜コレヘ

ハ出トサレタハ　定メテ道ヲトリチガヘナサツタデアラウギヤケレド　此上トテモ仕方

テモコヨヒノヤウニドウゾ道ヲ取チガヘテハ出トサレバヨゴザリマス　ソシタラ餘ノ人ノ

所ハ出ナサルノデモ　実ニワタシガ所ヘハ出トサレタノカト思ヒマセウワサテ

よみ人しらず

まそしいそぐ袖ぬらすもいつ〻の色をれまつのとる橋

○アシバラクトヤスカラニハ　コヨヒハドウツテモイシデトサレカシ　ソレニナンゾヤ

トリイソイデトツカハトイナヤルハ　サテモ〳〵キコエヽセヌ　カウシニノフリモギ

ツテイナシヤル　アノオ人ノ馬ノ足ヲツマヅカシテコケサシテクレイ門ノ前ナ溝ノ橋ヨコリヤ　○千秋云、譯の末にコリヤとは何をさしたる、おもしろし、さる勢ある詞は、いさゝか俳諧のさまなり。

中納言源ののぼるの朝臣のあふみのすけに侍りける時
よみてやれりける　　閑院

あふさかのゆふつけどりにあらばこそ君がゆきゝをなく〳〵も見め

○ワシガ身モ　逢坂ノ関ニハナシテアル庭鳥ナラバコソ　ナキ〳〵モセメテハ
オマヘノ近江ヘハ往来ナサルノヲナリトモ見ヤウケレ　ワシハサウシテ往来
ナサルノヲ見ルコトサヘナラヌガカナシイワイナ

題しらず　　伊勢

ふるさとにあらぬものからわがために人の心のあれて見ゆらむ

○古里コソアレテ見エル物ナレ　ワシガ思フ人ノ心ハ　古里デハナケレド　ワシガタ
メニ古里ノヤウニアレテウト〳〵シウナツタハ　ドウ云コトヤラ　人の心は古里のやうに
[illegible]、結句おもしろし。又おもふ
に[illegible]方にいひて詞は人の心方へうつしていへるなり。

寵

山がつのかきほにはへるあをつゞら人はくれどもことづてもなし

○上　思フ人ノ所カラ此アタリヘ人ハ度々来ルケレド　ワシガ方ヘト云
テハ一コトヅテモナイ　　上句ハたゞ、くるはといはむ序也

さかゐのひとざね

大そらは恋しき人のかたみかは物おもふごとにながめらるらむ

○ヱハ亥シイ人ノ形ヱカイ　形ヱデモナンデモナイニ　ドウ云フデ
亥シウ巳フタビコトニハヤウニナガメラルヽヤラ

ゆきまでれうこと　ゆきをむこうえんそもんのかぐさ　ゆかるよ
○又アフヽデノ形ヱノ物モ　ナニヽセウゾ　ヤクニタヽヌ物ヂヤ　コヲヱ
テモオレハ　亥シウ巳フ心カ　子エカラヤスミルヽモナイ
おやのまもりつる　ツイテ井ル　人のむとあふいとものびよあひて
おらひらるあひ　ぢにおやのもとひれば　きニヤ(カ)ハルトテ　ものきと
はとてもしるひぬぎおきて　ふりるをなをとを　かへるる
おきかを

○此裳ヲノコシテオカシヤウタハ　定メテ又意マテノ形ヱニヱヨト云ハ心
デコウゴザラウガ　コヲヱレバ　オヘノヽガ巳ヒダサレテ　腰ガ流レテサ
ハノ流ニウク　藻　モ　屑ノヤウニ　腰ニウク裳ヂヤワイノ
ゆきまでれうこと　ゆきをあ腰ふうかハりづちうりり
○形ヱハサ　ケウク今デハモウ　ニクイカタキヂヤワイノ　コレガナクバ　ヲリニハ又
ワスレテ井ル内モアラウ物ヲ　山形ヱガアル有　ヱテハ巳ヒダシヱテハ巳ニ出
シ　シバシノ召モワスレラレヌ

古今和歌集巻第十五恋五

五條のきさいの宮の西の対に住む人に忍びて通ひけるを月のおもしろかりける夜いとかくなむありけるとかたりてなむ

人しれぬ思ひをもつねはするものを月のなかるる夜にぞ泣かるる　在原業平朝臣

あひ知りて侍りける人の久しくまうでこざりける頃

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして

◎今夜コヽヘ来テ居テ見レバ　月カモトノ去年ノ月デハナイカサア　月ハヤッパリ去年ノトホリノ月デヤ　春ノケシキガモトノ去年ノ春ノケシキデハナイカサア　去ノケシキモ梅ノ花サイタヤウスナドモ　ヤッパリモトノ去年ノトホリデ　ワウタイナンニモ去年トチガウタコトハナイニ　タヾオレガ身一ツバッカリハ　去年ノ今ノ身デアリナガラ　去年ヲ今ノ人ニアハレイデ　モ昔トハ大キニチガウタコトワイノ　サテモ去年ノ春ガ来ルイ

二つのやどやなりけるとかたりてなむ

けやきもいとふかくなりにけるかなといひてなむ

さて結句の下へかくなりにけるかなとかたりてなむ

ふるさとは月やはあるときはるはもとのみにして

ものはなにしかはあらぬ

とよめる上句少しかはりてすべてこれに類せるものなるべし

物材ヤ物ヤトヒトツヒトツガ

流ルヽ物ノ流レテハモトノ流レノイキヲヒカカ

みづでよく洗のいきをひをけぢりひて。ゑぶきをぞかし。

ゑ―らぢ　　蘆糸形の部は糸作

花もゝ糸花糸てゝかぶ思ひ―ぅ糸ぶ出て人ふむもゝびもふりり

○内と糸コソをウト只ウテさんデ居タニッレニマア糸ガオモイハ　タ

ニナウテ　い花蕊ノ穂ニデタノヲ結ダヤウニ　オモテハレテ外ノ人ガトリク

ンデをテシマウタワイ　ハレ沙金ナ―ヤ　花蕊をむもゝびの伊勢

糸糸いうのもゝ―の糸ふゝ―て。餘材形ふ引て。

蕊糸かゝもゝきの糸作

ゝゝふのゝきうゐ―ゐをとる糸川ゝもゝ―ふ―ふみうゝとゝゐりむ

○タ〻ヨリニガリはテ居ヤウデアツタモノヲ　三　をデモナレニ　ナニニムヤウニナレ

ソメタ―ヤラ　ナニジケニナレナニニデリレテをレヌハサテくッライモノヂヤ

ゐ何間みつ糸

ゐゐぶゝ糸思ひひくもゝるさゝゝやうゝ―ゝをゝろゝむ

○サテ―ウイ―ヤ　オハコレホドイヲ糸ウヒフニ　人ハドタノレホドニヒフテクレヌ　オレ

ガヒフをリニオレヲヒフテクレル人ガアレカシ　ソレデモヤッハリムヤウニウイモノカ　タタシ

チスヤウニ　せハ男女の中をいふ。ふ松ゝ芝ゝとゝつ―河の澤ゝきハ一首の源

のゝうふゝそのゝうハあれバうるべし。

ものかゝ

ひさうゝのあまつゝそふもゝ糸ゝ形くふ人ゝをゝをゝでヒフ―ゐ―形ふ

○天ニ住デ居ルワレデモナイニ　ドウシタ―カ　人ハワレヲトホヨワニヤヒフ

ヤウスニオモハル

又てもまた又もあやまりけまばをを人ハいとゝ多くなる

○オレハをテモ〳〵ヤッパリ又シアヒタウ思フニ人ハ隠〳〵ナレルヨイヤガ

ルヤウスニスエル　又きく〳〵はやり〳〵ものゝ〳〵ふんまくのほ〳〵きふ〳〵

ゝとゝ〳〵ちきらるハ什格ありゝ

きのとしのうち

やもかくなきゝ〳〵ゝのきのあるれやいと〳〵ものゝとゝとバへぬ〳〵む

○雲モナウテ風モナイデアル秋ノテハヨウ晴テアルモノギヤガ　オレハソノ

ヤウナモノヂヤヤラ　人ニイトヒキラハレテバッカリ一生ヲタテル　カウタトヘテ

イフワケハ　慧晴ト　狂歌ト　河ガ肉シテヂヤニョッテサ　哥ト云モノハ

アヂナコラヨムモノヂヤナイカイノ

花ぐさめかゝ〳〵ぬ人のあるゝゝなどバすすれぬ〳〵む数〳〵ぬ身を

○一　ホカニイクタリモヨイノガアルナレバ　ワシガヤウナ人カズデモナイノガハ

ワスレラレタデアラウ

うき絵のゝ〳〵おひてなゞ〳〵浦まれバかゝ〳〵ふのゝ〳〵てゝうアハよゝ〳〵ち

○ナニ、ッケテモウイコトバッカリデ泣テクラスワシナレバ　思フ人ノタ〳〵ニ

ミエルノモ　タヾカリソメニロフサゲニチヨット立ヨラルヽバカリノ〳〵デコソア

ラウケレ　マコトノ心ザシデハエルノトハ思ハレヌ

いせ

あひよりひてあるゝゝひのゝ多仲ふやどゝ月さへぬ〳〵がれなる

○此ヤウニ物思ヒヲシテ後デ神ノヌレテアルウチニ名月ノカホ一デガ ワシガ新ト同ジヤウニ ヨウソロウテ ヌレテ五アエル一ワイノ

あひふいてのこる秋材ヲ見ル

おなじもとをへだてすべく

ひかりをひて同じやうにあることく

よみ人しらず

秋ちかくなりぬるかゆへ

○夢ハ秋ヨウオク物ヂヤガ 秋デナシニオク夢ガアルコトハ 物思フテ夜半ニ目ヲサマシテ居ルワシガ枕カラ床ヘオチル後ノ事ヂヤワイ

○上 道ノアヒダガキイエカシテ ヒデ居ル一ヂ出ナサラヌ アヽオソイ一ヂヤ

上白ハ秋ノ色ト秋材ノ色ト

○一二 セメテカリソメニチヨツトサヘ来テクレヌ人ヲ 打ミニ思フテ居ル

ワシハサア、ラチノアカヌ心ヂヤ

いひつたへバ

○ワシガ中ハ 水ノナイトヽ云ヘ 水ノ一サツテ 深イヤウナ一ハナイ中ヂヤニ

タヾ云シイコトヨリ一サ

ナニシニ末カケテ深ウワシハ思ヒソメタ一ヤラ

時の時ノ

○暁ニハ時ノ八子ガキトヽテ 時ガキツウシゲウ羽タヽキラスル物ヂヤガ 君ガコヌ

夜ハソノ鴫ノハ子ガキホドシゲウ　ワシガサイク夜トナシニ多ク息ヲツイテ嘆キマス

暁は下句のことにいへるへし　数かくとハあまたゝびの鴫の百羽がきの絶ずよりていつまでもことハたゞ歎きそふるの心ばへなり。

玉かづら今ハ絶ゆとや吹風乃おとにも人のきこえざるらむ

○ 一 モウハキレテシマウトテヤラ（ニや五らん）此ゴロハイツカウ 三 オトヅレモセヌ

わが袖にまだき時雨のふりぬるハ君が心に秋や来ぬらむ

○マダ（まだき）ソノ時雨デモナイニ此ヤウニワシガ袂ヘ時雨ノフツ多ハ　君ガ心ニ秋ガキタカシラヌ　ソレデ此袂ノヌレタハ涙ノシグレヂヤ

山の井のあさき心も思はぬを影ばかりのみ人乃見ゆらむ

○ワシハ山ノ井ノヤウニ浅イ心デハナイニ　ドウシタコトデ君ハ　イツデモ影バカリ

見エテヨリツカシヤラヌコトヤラ　むかしのことハいつはりにこそおもはるれ

須まハわびしきことハ何とてものこそ。

わすれ草たねとらましを逢ふ事のいとかくかたきものとしりせば

○此ヤウニキツウ逢コトノナリニクイモノヂヤトミタナラ　トウカラシツタナラ　忘草ノ種ヲトツテオカウデアツタモノヲ　ソレダラソレヲ蒔テハヤシテ　此節恋ヲワスレルヤウニセウモノ

こふれどもあふ夜のなきハ忘草夢路にさへや生ひしげるらむ

○ナンボ恋シウ思ウテ　寐テモ　夢ニモ　逢ウト見ル夜ノナイハ　カノ人ガワシヲ忘レタワスレ草ガ　夢ノ方ヘマデハエシゲツタカシラヌ

夢にだにあふことかたくなりゆくハ我やいをねぬ人やわするゝ

○爰ニサヘアハレヌヤウニナツテキタノハ ワシガ拙ク思ヒテ工子ムラヌユエカ
又ハ君ガワヲ忘レテ心ガカヨハヌノカ 俳林ろーけすとろーし
ぎんぎんぎんぎん俳
もろこしも爰ふるしかばとりて思ひぬ中ぞ恋をかりける
○唐ハキツウキをイわヂヤトサテ居ルニソレモ爰ニアタレバ 近イ一デアツ
タガトカク唐ヨリモドコヨリモ きをイノハ思ハヌ中デサコザルワイ
さごのゝ ぢる
ものゝ思ひのゝ恋のつ毎日ぬれば人をものぶは苦をぬひける
○長雨ガフレバ フルイ家ノ形ハクサツテ忍草ガハエ出ゲルヤウニ タツタヒトリ
拙思ヒノシンキナ ナガメバツカリシテ月日ヲオクルワタシナレバ人ヲ恋忍ブ心

ノ忍ブ草ガサシゲウナルワイ

恋ゑ ぢ ハ ゑ と も 恋 き ま で い う ふ ふ り ま つ と る き 人 を と ろ と せ ー ま た

○心ヅヨウテ来モセヌ人ヲ クルカ〳〵ト待テ居タマニ ツイ月日ガタツテコ
チノ在ハ 恋ガアノヤウニシゲツテ逆モナイホドニアレタワイ
今こむ〳〵いひて分とーぬ しさより思ひそしの袖とのゝぞるく
○子カイヤチニ又来ウトステ別レテイーダ教カラシテ 毎日ま人ノるバツカリ
思ヒグラシニクラシテ ヒグラシノ鳴クヤウニ オレヤ泣テバツカリサ居ル
よゝ人ーらんど
おもやとは思ふものゝ〳〵ぞ しのなく夕雲ハさちまれて

○ナンボ待ダトテ来ウカヤ クルーデハナイトハ思ヒナガラモ タカタヒ
グラシノ鳴クジブンニナレバ 門口ヘ出テ立テ居テハ モシモヤト待ツ心
ガアツテ ドウモ思ヒ切ツテハ居ラレヌ
今ハ〜ハ〜ヨビフシ〜ヨとさ〜ぐふ〜ふかく〜つゝめもとたのしゐ
○カウ久シウ来ヌカラニハ モウハト思フテ カオトシテ気ヲクサラシテ居タ
モノヲ蛛ノ糸ガキルモノヘカツテ ドウカ又ホミノアルヤウニ思ハセルヽ蛛ガ
蛛ノ糸ノキルモノヘカツハ 待ツ人ノクルシラセヂヤトヤラ云ーヂヤニヨツテサ
いまハとゞと思ふものか〜ワもれつ〜ゆ〜ゝしゝのまぐもやまぬう
○モウ来ルコトハアルマイト思ヒナガラ ソレラワスレテハ又シテハ待ツ心ガ
マダマアヤマヌ〜カナサテモ〜

月夜よハてぬ人まちるかさゝりあもゆゝるひとびつゝも祈を
○ヒヤウニサヤカ十月夜ニハ 来ヌ人カモシヤ来モセウカト待シテキガモメル
イツツ マツクラニ墨ツテ雨ガフリトモスレバヨイニ ソシタラツライ〜
ヂヤト思ヒ〜 モ寝テシマハウニ
うゝとていふし枕かゝまでうとゝびけさ初月の祈をぞぬきぬ
○五月ノコロヒヤ田ヲウエテオイテイヂ人ノヒヤウニモウシ田ヲ刈ルジ
セツニナルマデ 待デモ〜ワせ子バ サテモ〜ナサケナイ人カナトオモ
ハレテ ケサ始メテ雁ガナイタガ ソノ居ノヤウニサワシモナイタ
さぬ人をまち夕ぐれの秋風ハいとふ〜ふけバりうびゝかゝむ
○コヌ人ヲ待テ居ルヨウ方ノ秋風ハドノヤウニ吹コトデゴレホド怨シイツライ〜ヂヤラ

久しくもなりふるかな住の江の岸の松原まつはしるらん

○ワレガ見フ人ノ来テ見タハイツノコデアッタヤラソレカラ高ニアハズニアリ
久シウナッタナカナ　来モセヌ人ヲ待ッノハサテ〳〵ムダイ物デサゴザルワイ

久しくとゐ海ふ行の江に松とつひにたれを人をまつふりけるこ

がよみのおやきこ

きみのえはまつ久しかるらんとぬるとばあしらづの海よりあなたはなし

○コヌ人ヲクガクト待テ居ルカニ久シウナッタバワシハ毎日ナカヌ日ト云ハナイ

ねゝ初〳〵の松にうひ立てはるもかゝふるり

ふりもとばらゝがやまとはうふはるもゝ〳〵まかるとて

みそはたゝ〳〵

伊勢

みそはたいふまちみひ年ゆゝ

○ワタシモモウ京ニ居テモオモシロウナイニヨッテ　此度大和ヘ下リマスルガ　三輪ノ山ヲト　ムライキマセト古哥ニヨンデアルヤウニ　今カラアノ方デ恋シイ人ヲ待ッタトテモ　何年タツトモ　タレモ尋ネテ来テクレル人モアルマイト存ジマスレバ　ドウシテマア待ッヲ、セテ逢ハセウソイノ

しらべ

吹やうを年ゝ秋萩のうつりもゆくり人乃こゝ浮世

宇林院のみこ

○アチコチトフキマヨウ　セノ爪カサムサニ　萩ノ花ノチッテユクヤウニ　ヨワヘウツ〳〵テユクカマア　人ノ心ガ

俗歌ラシ　おけよわ

をのおもち

今ハとて我身時雨にふりぬれバ言の葉さへにうつろひにけり

○ワレガフルウナッタレバ　モウイヤト思ウテ　一ヘカタオツシヤツタ此間ノ詞モ　今デガチガウテ来タワメワイナ　時雨ハふりしといひ又このもうつろふ

しぐれも料なり　○略秋云此うた二三一四五と句をつけてうつるべし

かへし　　　　　　　　　　小野さだき

人を思ふ心の木の葉にあらばこそ風のまにまにちりもみだれめ

○人ヲ思フ心ガ木ノ葉ナラバコソ　風ノフクニシタガウテ　チリミダレモセウケレ　ワレガソナタヲ思ウ心ハ　木ノ葉ノ風ニチリ乱ルヽヤウナカルヾシイ心デハナケレバ　何事ガアツタトテモ　ナンノメツタニカハラウゾイ

なりひらの朝臣きのありつねがむすめにすみけるを（ノ娘ヘカヨヒケルガ）うらむることありてしばしのあひだひるはきてゆふさりはかへりのみしければ（イツデモカヘリケレバ）よみてつかはしける

あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから

○天ノ雲ハ目ニハ見エルケレド遠イヨウナ物ヂヤガ　オマヘモ近イ所ハテウドソレデ　昼ハ此方ガアツテ　サスガ目ニハ見エハシナガラ　ヨソ〳〵シウナツテゴザア　ソナタカラ夜ハオトマリナサツテ下サルヿハナイ　サテモ〳〵キコエヌセヌナサレカタカナ

かへし　　　　　なりひらの朝臣

ゆきかへりそらにのみしてふることはわがゐる山の風はやみなり

○ワシヲ雨ニテタトヘラレタガ　ソレホドヨイタトヘヂヤ　ソナタノヤウニ　ワレガ　イタリキタリバツカリシテ足ヲトメズニタテル人ハ　其雲ノカヽツテ居ル山ノ風ガ

ツヨサニ トヾ一ツテ居ルヿノナラヌヤウナモノデ ワレガカヽツテ居ルソチタノ
心ガヽヅクサニ ドウモ夜ルハト一ラレヌギヤワイノ ウヽハ為ものの語。

かゞぼくしのおわきこと

○キルモノハ着ナレバヤハラカニナツテ 身ニヒツタリトツキ一ツハレル物ナレハソノ
為リ二人モ ナレタラバ 身ニシタシウコソナラウハズナレ ソレニ引テカラモヤツハリ
山ヤウニヨリ〳〵シウテ ジヤウヒウ心ニカケテ為ウ思フテバツカリ居ヤウコトハ
思ウタヿカイ ナレテカラモヤツハリ山ヤウニアラウト思ハナンダ かけてハ衣の語。

とゝとのり

秋風ハ身ヲ分テ通ル物ゆゑ人のんりそ〳〵になる〳〵む

○秋風ハヤヤ旁ナドラ吹分ルヤウニ 人カラダヲ分テ腹ノ内ヘ吹テハ
イルモノデモナイニ ワレガ思フ人ノ腹ノ内ナ心ガ 風ニ木葉ノ空ヘ乱ルヤウニヨリ
ヘウヅタハドウニヿヤラ 上句の侘ぬ枝ナ寸ともふるゝ からの流ども
のゝ〳〵ヨリハ身ヲ分テ〳〵いとゞつゝ。

添宗干新氏

ちるもおくなちとゆゝ人のこゝろ秋ちるこのあるなるゝ

○次オニツレナウナツテユク人ノ詞ガサ 秋ヨリサキノ あるヂヤワイ ナゼトイフニ
方方ニテオイタヿガサツハリカハツテ一ニウタロサ 木葉ノ色ノヤウニ
ビヤウキノジセツ
ちゝちゝ形てりゝこゝろあひきりて行〳〵人のとハ
クワイキシテカラ
でゝちおこゝろて後ゝ〳〵とりれバよゝ今てはゝう

八一番ノ

ちで出ものもなくてなげかへりはしつゝ人よりまづ出しとそ

○サキダツテハワクレモワヅラヒニシテスデニ死ニスデアツタガ ソレナイオ、ヘヨリ

先ヘワシハシデノ山ハコエイソイト存ジテ支度ヒトツ整ヒテ出ルトホツテ元テサモドツテ来ルニシタ

あひもとろ〳〵人のやゝやくかもかふなりけるはりぐ

ふやまるちれ紫り多とさして色ハきりぶ

こまちがはな

はるとて物をゆくをの〳〵後芽ハ今ハ思ひぞたゝぎりえけ

○秋モヨテ冬ガレニナツタセハ火ヲツケテヤイテモエル物ヂヤガ テウドモ

をリデ年ガイテオヘ恋ノカゞ〳〵成タワタハ今デハモノ考ル物思ヒガサ

モエニスワイナンデ此浅芽モ此をリニヤケ、シタ ゴラウジテトサリマセ

とのあるひ〳〵ゝ侍ものかりりるをふせ方のとえけ

侍ひ〳〵〳〵〳〵〳〵 いせ

多枯の野べ〳〵ゝ多成思ひとバ消えてもちとまゝ〳〵ほしあを

○人ニヲスステラレタワシガ身モ 多枯ノアノセヂヤト思フナラ アシテ焼ヤ

ウニ 今コソ見ヒガモエルケレモ ソレデモ又春ニナツタナラ 芽ガデルデアラウトヒテ

春ヲ待ウモノヲ ワシハモウアノ多枯ノ野トハチガウテ 春ニナツタトテモ茅ノ

デル村ニモナイカチヤロイン 從女シウモス井リヤウシテタモイノ

とゝけり

新しらべ

ちのあとのきえてしらきゝ法れて行ゝ村まるゝ水

○水ノ涙ノキエルヤウニキエルホドウイ我身ヂヤト思ヒナガライツモカウ
バカリデモアルヿイト　一ダ末ヲ村ミニ思フテヤツパリ一ア消モセズニカウシテ
居ルハサテ〳〵ラチノアカヌ我心カナ。お秋云なら〳〵てをらの涙
そぬぐもてしいアリ。

みちゑ川ゆくゑなくバ　ほ　よみ人しらず

○水ゑ衛川ニ有デ流レル水ガテイナラバコリ　ワガ中ヲ　ついぶ　トラ〳〵切レテ
一ウトハ思ハウヿナレ　水ノナイト云名ノ水ゑ閑川サヘヤツパリ名ハアツテ流レ
ルナレバ　あ中モ絶タヤウナレド　ヤツパリ涙ハ出テ　タエキリハセヌコモアラウワ　サテ
ほのの白ヒダ中をしいて思ひきと　身をしるハ　ハ　ハ　いとゞん。
身をホ川の水脈をかゝ〳〵みや。

みつ涙

○人ノツライハ　一　ハテセヒガナイ　人コリワラカラウケレ　オレハセハカタ云テオ
イタコトハイツデモワスレヿイト思フ　そやゝハ云ヒ川の涙
よゝ人しる

世中ハ人の心ハ花ぞ思ふ

○世中ノ人心ト云モノハ　テウド花ノ色デ　カハリヤスイ物デサゴザルワイ
ナニカラ云テ　ヤ　ク　リ　ハ　そ　あ　ぎ　ば　ら　ろ　こ　も　を　か　ま　や
○ウタテヤ人ヲ思フコチノ心ガサ　ニクイヤツヂヤワイ　コチカラ思ハズハ　サキノ心ノ
カハルモ惜カラウカイ　人心ノカハルガツライモ　コチカラ思フユエヂヤワイ

冬とハいはざれども二代の句ハ冬ふつきていへる詞なり。

こまち

色みえでうつろふものハよの中の人の心の花にぞありける

○草ヤ木ノ花ハ色ガアルユヱニウツロウヂヤガ　色ハアルトモ見エズニウツリカハルモノハ　世ノ中ノ人ノハナゲレイ心ノ花デサゴザリマスワイ

色みえでハ冬のなきをいへる。飾我秘二句の注なるべし

よみ人しらず

わのみや世をうぐひすとなきわびむ人の心の花とちりなバ

○花ノチッテシマウタヤツニ　ソレソノ人ノ心ガカハッテ　ノイテシマウタナラバ　ウイコヤライコヤト思フテ　相手ナシニワシヒトリ　鶯ノやウニ泣テ居ルデアラウカ

世を男女の中をいふ。下句を人の心の花としりふ　ちりぬるをしぼるハおもしろし。花ハ冬ふりかくふしいへるがよし。鶯しのゝ　あるし　○よ人ハ鶯きのびんの譯ふ注テ居ルデアラウカと　鶯ハ上ふウライコトヤト思フテ　あるハ心ひとつ細の譯たしかなるがよくあれ　あられりけれど行多しかるべし。

そせい法師

おもふともかれなむ人をいかゞせむあかずちりぬる花とこそ見め

○イカホド約念ニ思フタトコテモ　心ガカハッテトホノイテシマウ人ヲバ　ナントセウゾ　ドウモセウガナイ　スレヤ　タダアスタラスウヂニ草ウ散タ花ヂヤト思ウテ居ヤウヽデ

よみ人しらず

今ハとて君がかれなバわがやどの花をばひとり見てやしのばむ

○モウユニギリトヒフテ君ガトホイイテ来ヌヤウニナウタナラ　コチリをノ
花ヲバワシヒトリガステ　君ノヲライロクトヒヒダスデアラウカ

む孫四位の朝臣

元家かもとやもとろしつまともあきくんのふ家ハおろそ
○人ノワレヲ忘レタリスレ共モ相テモレ又モトノヤウニヒフテクレルヤモアラウ
カトヒヘバワシヲワスレタウレナイ人心ヘ家ガオケバヨイニトヒハレル　家デ
ハウクイ家ガ相ルモノナレバ　をワシヲ忘レタ忘ヲノカレルヤウニサ
完ヒ伊勢は春風ろ〜寄かせ好ひろ所よみく
うれまを　をせいろし
ときて絵家伝をろ面白く思ひ〜ハ浦れ相きくんのむかりりり

○ワスレ草トモ申ハ何ヲタネニシテハエルコトカヒヒフタカ　フノ名ヲバ　ンレヲ
イ人ノ心ヲヤワイノ　ハテツレナイ心カラシテ人ヲバ忘レルモノヂヤワサ
部〜ろ絵を

秋の田はいなてふ〜と家ハ相ふ所をしとろ人のかゝむ
○一　ソノガキラウテモウイヲトヒ河ヲカケタ〜モナイニ　人ノヒヤウニ家をノイテ
来ヌハ　何ヲウイトヒウテノ〜ヤラ　かけかゝ皆橋の孫の河く
きのふ〜ゆき

初乃はろ〜そ海をよの中ハ人乃こゝろ家秋しらけまバ
○人ノ心ノ秋ガウイニヨニ　ワレハ〜ラワタレ初乃ノヤウニ泣テヲタテルワイ
よみ人しらず

いのちもとうしとも思ふとなどう波のいとなくむ

○拍ラアハレト思フ所モ ウイト思フ所モ トカク波ガホロ〳〵ホロ〳〵

トコボレル ナゼニ代ヤウニ波ガ五イソガレウコボレルヤラ

袖我ぬれぬとてふそぐ〳〵きぬ

身をとゝ〳〵思ふきえぬものなれば〳〵ぬ〳〵ぬふてそなん

○キツウヲヨウイト思ウニハ命モ消エサウニ思ハレルケレドモ コレデモサスガキエセヌ

モノデヤ スレバ此ヤウニウイヌデモ ヤハリソレナリニ タテテヲ世デサゴザルワイノ

典侍藤原直子朝臣

いのまのかゝ屋よりもひ〳〵しれかゝふをとてはめ逆とバ恨ミじ

○ハ吉ノ苅ル蕗ノ中ニワレカラト云虫ガ住デヰルハ子デヤト云フ事ガ 虫ノ名

ノトホリニ 伺ヌモワレカラヂヤ 我ヲカラノコトヂヤトレウケシテコソ

泣ナラ泣キモセウナレ ツレフウ人ヲバ恨ミてイブ ヨウ思ヒハシテアレバ

人ヲウラミルハ大キナフカクヂヤ のよ秋云ヒ〳〵のり已フ〳〵思ふよ

虫の名よハ〳〵でゞ蕗よりすむ

ひて〳〵ふ〳〵いつ〳〵 袖ハ仁波紀ヲ あるをも思ひてゞ

〳〵るゝやう〳〵ん

いなむ

あひえぬもうれも紀ヲ〳〵れ思ひをとゝ〳〵ばとゝ〳〵ふ弐

○ををタイ人ニアハレヌノモ を人ノワライノモ ミンナ系ヲカラノ〳〵チヤ スレヤ

ドレホド思フタトテ アハレルヿデハナイニ 代ヤウニト 紙ノトケルハ サテモ〳〵アア

ガテンノワルイト紙カナ ト思ものとゝハ人よりゝ〳〵きとろ〳〵

寛平御時きさいの宮の歌合によめる　すがのゝたゞおむ

つれなきを今ハこひじと思へども心よわくもおつるなみだか

○タエナイ人ヲ　モウ恋シウ思フマイゾト　タシナムケレドモ　ナニトゾスルト思ヒダシテ涙ガコボレル　サテモ〳〵心ヨワイ事カナ

題しらず　伊勢

人しれずたえなましかばわびつゝもなき名ぞとだにいはまし物を

○シノウデ居タヘシレズニ絶タ中デアラウナラ　絶ルハツライ事ナガラモ　無イ名ヂヤト云テ　セメテハウキ名ノ立ヌヤウニナリ〆セウモノヲ　ワシガ中ハ　ハヤ世ニ人モ知テ居レバ　無イ名ヂヤトモイハレ子バ　絶タバカリカウキ名サヘ立テ　サテモ〳〵ツライ事カナ。○ふ秋云、すべてましをとゝいふ詞ハ此歌のごとく　おほくことをかくしたるものとすべし

よみ人しらず

それをだに思ふ事とて我宿を見きとないひそ人のきかくに

○人ヲ恋ウ思フ時ニハ　其人ノ家ナリ共ナツカシウ思フモノヂヤガ　サウ子ガフ思フテ居ル事トテ　ヒヨツトシタ詞ノハシニモ　ワシガ宿ヲ見タト云事モ　人ノ聞ツトコロデ沙汰云デハナイゾヤ　エテハソンナ事カラシレルモノヂヤ　ひがよはきつにへきこゝろふかうしは絶ゐを餘残に詞をふるなづさしての言ふさぐり。此余計なむかしにまれ〳〵おほじの詞との誤りもなるらん。

あふ事のもはら絶ぬる時にこそ人の恋しきこともしりけれ

○自由ニアハレル時ニハ　恋シイト云ハドノヤウナモノヤラシラナンダニ　今カウスキト絶テアハレヌ時分ニナツテハジメテ人ノ恋シイ事モ知ッタワイ

とびちらぬさくらのかゝるをいづくとかはるべきものぞ後ろ髪

○ムヤウニ玄ニアグミハテタ時ニ人ヲヤウハリイトシイ玄シイトヒ
ウテ後ノコボレルハドコガ玄シウテ〻ヤラ　ムヤウニウイツライメニアハスル
人ナレバイトシイコモ玄シイコモナイハヅヂヤニ　ひうれ〻きハいし
わり〻ほうさんさて三のゐとゝ玄ゝいて〻ゐとたづひふ
おもゞ〻てらるゞ　あすふ世びよ後のおつんとゐふたゞう
有原おきうど

昭こゝもぬきてもゝをむかゝるぞるき後ふみゐる新るゞ〻て

○ウランデモ泣テモムカナシサヲバ泣ヲ相手ニシテイハウヲ　ほフ人ハモハヤ後テ向
ニアウイモナケレバ後ヘウツルオヒガ新テナウテハ外ニおもヒニシテ玄ウヤウハナイ

多さとゝバ人うゐとゝばうちひ欲うむうゝ〻ゐ多う

○ユラカタニナレバ君ガキテ麻モセヌ床ヲハラウテ　独リネルトテハ　イツノ夜デモ
イツノ夜デモ　ツライコヤトほフテタイキヲツイテ子ルデヤガ　ワレハアムヤウニ
ツライ欲キヲセウタメニ　生レテキタ甲カヤ　サテモ〻イヂワナ甲カナ

つゝぶ〻この赤月こゝろ〻ゝえくりうゐのもむてよゝゝみつゝうる

○サウハリ後テシヽ多中ヂヤノニ　ゝ人心ノ玄ハ多イヨ　又ヒツカヘシテムヤウニ恨
メシウほフイワイノ　今サラ昭ゝダトテナンノセンガアラウゲ　サテモグチナワガ心ハ

ゐ〻小田とあ〻ゝきうしかゝ〻ゝてもゝ人のんゝ後アゝてゝゝてやまあ

○アラ田ヲ行ベンモ〻スキカヘスヤウニ　アル行ベンモ人心ヲトツクリト

ヨウカンガヘテんテコワ モウライナアカヌトエ一ハ定メウ一ナレ

ありてあのそもそもさおとしれるしハそもしこの数ぞをけく

○淀ノ真砂ノ数ハヨミワクストエテモ 数ハヨシデモ〳〵ワキマイナドヽ

ギヤウサシニエテ ワシヲヨロコバシテオイタ ソノ淀ノヽサゴノカズハ ミヅクサ

イヱノケシカラヌタトヘデサアアツタワイ

いうべよりそのもとさしてゆくのいやらかざるもあるかるもよも

○芦ホカラヱラサシテヅヽト花デユクノダン〳〵トキヲウナルヤウニ

ダンヽトロフ人ノトホノイテユクワシガ身ハ五もアカナシイ一ヂヤ

ちづもつゝもみづゝうもうれ紫乃んの枯よりはみぞとびき

○はゝ面ガフリ〳〵シテ木紫ノ色ノカハツテユク秋ノコロハツライモノヂヤガ

ソレヨリハ ヱテオイタ河ノカハル 人ノ心ノ秋ニアウ身ガサナホツライ

秋風のふさ〳〵吹あ〳〵むさ〳〵やハらぐ〳〵葉ふの色かりそめ

○秋風ガフキサヘスレバ アノ廣イ武蔵野デモ ヤハサツリミナ黄ノ

色ガカハツテ枯ルワイ 人ノ心モソノトホリザ 飽秋そぶ〳〵

小町

秋風ふかぬたのもとそかるゝ〳〵ものとがこむるくれるぬとへば

○秋ノ大風ニアウ稲ハサキノドクナモノヂヤ 石ヤノ形ニシテ居ル田ガ

サツハリシヘヒニナル ワシガ中モテウドソンナ物デ 人ノ秋風ガフイテ

形ニ見フタヽガ 結ムダニナツタト見ヘバサカナシイワイノ

あのこハ田の実ふるそりさてやのあ。あ身むるくとづけ

てハ人〻ハ秋ノ風ハ秋ノ風ハ人ノ心ハ秋ノ風ハ人ノ心ハ秋ノ風ハ人ノ心

ガラ消ル涙ノヤウニキエテシマイナリセスレバヨイ。よれば。ぬれ。ハ。憂き。
その。ふる。もの。ふる。べし。

よみ人しらず

○紀ノ國ノ妹山トせ山トノアルサヘ　なを門ガ流レテ来テ　中ノ人ダテガ
アルカラハソウタイ人間ノ男女ノ中モ　イツデモ始メノヤウニムツマシウハナイハズ
イデ　久シウナレバ　オノツカラカレコレガ出来テクルノモ　ソノハズノイデヤ
ハテセヒガナイ　山デサヘサウデヤモノ　その中ハ男女の中ハ
つゝしんでく男女の中ハひを。そゝも。その中ともいふ
つゝしみ。ふかい。でし。

古今和歌集巻第十八雜歌

長備歌

いもうとせ方まかりける時よめる　小野篁朝臣

なくなみだ　ふる雨ハ　降りぬとも　ふるさと人の　見まくほしけく

○雨ガフルタチラ　三途川ノ名ガ出テスデアラウ　ソレダラ　妹ガヨウ後ラズニ又
此世ヘ戻テクルモアラウノタメニ　はオレガ注ノ戻ガ降ウブ雨ノ色ニフレバヨイ

さゝのおもてにあれいまゝちぎる　送葬　ちゝ門の行りふ
おくらしきる病くるしん　ちの後おちてぞたぎつ　匂　門ハ実ぶよりまでの名よりてみ生

○三 ハ川ノ名ヲ白川ト云ハ ハ殺オカノレナサレタ四 良房公様ノ御五世ギリノサ
名デアフタワイ ハ殺ノ御カクレナサレタ ハ悲シサニ法ノ ハ赤イナ
血ノ涙ガ サワサト流レル スレヤモウ白川デハナイ赤川ギヤ

ほのかなるきおもいすらも見みまうりふるゆふ
ぬるさはなれをきめて 侍都 勝延

○蟬ハカラヲヌギステ オイテドコヘカインデシマウ ヨモヂヤガ シレモフノヌケガラハ
イツマデモ残ッテアルニ 人ハ死ヌルトソノマヽ ヌケガラサヘ焼テシマウテ 跡ヘ残
シテハオカヌモノデ 此基督ハ何様モ此ノ骸サヘノコラヌハ サテ〳〵オノコリオホ

イ〳〵ナヤ セメテワノ御火葬ノ煙ナリモ残ッテアレ 山ノ原ノ山ヨ フシタ
ラフレヲヌテナリ死ハ骸ノナゴリギヤト思フテ 少シハカナシサヲハラサウニ
なぐさうん〳〵いふて 塚の方にいひ〳〵もどる人ハ塚ハ骸ハ
かゝとなてなぐさめるよ 此間ハ煙さふたてそわとこなてお
ぐさうん〳〵いふをうと上ふひてお〳〵ぬうせたるものゝ心なるふハ
かるし〳〵おわ さる仏をそ〳〵でハまどふ〳〵おわくべし

うむつきのみをを

涙ぬれぬすべの袖 一こゝろわ〳〵ばかりしばくり ハ墨染よさけ

○さる基督スヲヲサメマシタ代 涙ノ中ノ中ノ袖 心カアルナラ 今年バカリハ
墨染ノ色ニサケサ 人モミナ墨染ノ服ラキテ居ル春デヤニ

藤原敏行朝臣の方ゆりふるゆふすみてかの家
ふたがしけるを　きのとしのつも
行てもみん白浪でもみしらぬさいうつせこのよそ爰ふなをける

○けさノソコモトノ心不幸ニウイテ　ヨウヒウテアンヤスレバ　爰ト云モノハ子ムツテ居テモアンルモノナリ　又麻イデモアンルモノデゴザルワイ　ヒ人間ノ世ガサ　ソウタイミナ爰デゴザルワイ　スレヤ麻イデモアンルデヤワサアヽ敏行殿ノ心ノコトニ爰ノヤウニ存ジヤス

ひとりのみよかりふれば
きもけたつゆき
爰ふりそひ雪ふりもまさる
ゆきのうへにふるゆふけかな

○世中ヲバソウタイ皆爰ト申サ云ウテ　ヤワイ　ソレニ今ヤデハ　正ヤウジ　ノコトガアルモノデヤトゾフテ居タハサテモアハウナリカナ

あひたれりしをとめ乃身まとりふけるゆふくれ
みふのたぐ糸

○子ムツテ居ルウチデアンル爰ハカリヲ爰ト云ウテカイ　ソレバカリデハナイソウタイ此ヤウナヨノ中モ正ヤウジノコトハ只ハヌ　ミナ爰デヤ

ひとのみよかりふりゆくゆふ
ゆきをとけバ閑もよどみりもゆふ
ゆきをとけバ閑もよどみりもゆふ

○川ノ閑ヲ　ミガラミデセキトメレバ　流レテユノ水デモ　閑ニナウテトヤル也

ヂヤワイ　コレニサ死ニデユク人ヲセキトルニガラミハナイ

故郷ニテ母ニ苦わひとりて行ク人のこゝろふ

ふるさとゝ思ふ故郷ハてゝある　開院

○人ノ死ヌルハテウド流レテヨシ川ノ水イトホリデ　ニタビ返ツテクルトキハナイ

此夜ノ内ニサヅヤノ力落シ内椎量ヤレシタ　ワタシモ内ニカラ落シシタ

サキ〳〵早ウ死ニシタラヨカワタニ　カウシテ生テヲリテスノガ嫌シウテ　イリカヘシク

カナシイハ　ヒヤ　ヒヤ　ノ内ノ内デゴザリマス　先ヘ死ニシタナラ　コンナコトハウケタクハナル

マイモノ　強ヒテ　ヒヤ　ヒヤ　ふたゝ形ハ　三の白れ　ヒヤ　ヒヤ　の形

コトヽ　ヒヤ　ヒヤ　て味ハヘしさて　ヒヤ　ヒヤ　ヒヤ

ちゝが思ひそめしよりの　九月の月ごろ

かみな月たゞとゝぬるゝりみぢ紫ふかぬるゝ　なりけり

○此十月ノ時分ニヌレタル紫ヲ入レバ　トシト悲シイコノアル者ノ袖ヂヤワイ　今度母様ニハナレテカナシサニ　血ノ涙ヲ流シテヌレル喪ガ袖ト　アノ

和歌ト　色モヌレタヤウスモ　トワトオシナシイヂヤ

ちゝが思ひそめしよりの　あぢさゐ

ぬぎ衣ぬぎ衣ぬぎ衣　糸ハ思ひ人の形見ぞの玉のをぞ形見ける

○ワシガ今服デ着テ居ルキルモノハ、ハツレテ乱ル糸ハ涙ノ玉ヲワナグ緒ニサ

ナルワイ涙ノテウド玉ノ様ニヲボレルガハツレタ糸ヘカル八玉ヲ結ヘワナグヤウニ入エテサ

思ひ出ずるしの秋山でゝ　まかりけり　遠ゆてよめる

和歌のおくそこの山田かりそめふるよの中おもひぬるかな

○ 一二 今ヒハ世中ノウイ物ヂヤト云コヲタヾウカヽトカリソメニ思フテ

居タカナ　今度不幸ニアウテ　世中ノウイコヲ　古実ニ思ヒレツタ

ありしよりかりそめ人をとゝ思ふ　ふるさとてよめる

ふるさとみれば

玉波の玉ぐたりしハやうれやたゞ涙乃面とこのゝぬる

○半様ノキテゴザル服ノ其袖ハ雲ヂヤカシテ　涙ガ絶ズヒタモノ雨のヤウニフリ、ス

妻ノ親ノ息中デ　ハヨヒ人ガ

めしおやの思ひ出ちふけりるとうゝのとゝ思ひ

はゝゝそせりりれば返りるふ後る　よゝ人をとゝ思ひ

あ〜幻きの山ぶかみ人はまれなる池乃ひるがほ

○私モモウハヤ　ロクハ世サ及ビノ者ヨリ　山ニ住ハジメシテ　泣テバカリ
ラリ一スレバ　服ノ袖ノカワキ一スヒ一モゴサリ一セヌ

詠雪はらはらと池のあやめの葉とそそてよろ

たもとの紅花

ゆるかな

○アノ池ノ水ヘウツタ花ノ影ノハツキリト見エヤウニ　崩ハテツタ君ノ面影
ガアリ〜ト一アラガヤウニ思ハルヨウカナ　もづく〜ハあの水の中ハ見ゆる
と〜人万葉ホ〜ー　ま〜ちどりと考へて起し　ゆるを或ハ流浮へ
ひ或ハ流ぶ〜ふ〜ハ　ゆ〜ぶ〜〜〜人万葉ホ　ふまわる流ぶかけるとしらの

あ〜ハ清りて出る中あ〜ハ流ひ〜と　ま〜〜とい〜〜〜〜なし
　　涼菓のみかどの涼見の日　文屋やまひで
菓ゆ〜ひ菓のあ〜ハ新〜〜〜て〜る日の白しり山やハあ〜〜ハ

○サイチウト照ル日中ノ日カ　涼イ夜ニカクレテ　ニハカニ冷ウナツタヤウニ
先帝様ハ　一ダサカリノ涼年デ　俄ニ冷ヒナツテ　涼ノ涼イ涼菓山ノ
谷ヘヲサメ奉ツタガ　ホドナウ涼一周忌ニナツテ　今日ハ其年ノ忌日ノ
日デハナイカイ一ア　アヽ〜ま時ハ悲シイコデアツ事ガ　去年ノケフ
テアツタト思ヘバ又〜ま時ノヤウニ思ハレテ　サナモ〜カナシイコヂヤ
　　涼菓のみかどの涼見の日　仏義人仏出てよる月の明れつ〜
　　四つ〜を〜ま涼涼園ホ　ふりふりれば〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ぜーて初えの必よのゞりてかゝらあゝしてゝりてとその
又のゝーみゆ人ゝゞゞくぬぎて行ハかゝりかゝりなゞりるどよ
ゝしびゝゝ伏ゞまゞとゝ　　俤正遍昭

みゆ人ハ花の衣よりぬるりこゝけの色りしよかゝるきぶちよ

○世ゞ人ハ皆ゞゝ花ハモヤゝ服ヲヌイデ　花ヤカナ衣ニナツタチヤガ　あハソンナ
花ノ衣ドコロデハナイ　ヲダ今ニ成ヲコボシテ　注テバカリ居ハ　セメテハ代成ニヌ
レタ苦ノ衣ノ袖ヨ　カワキナリ氏セイサ　人ハミナ彩衣ニサヘナツタチヤニ

河原のあやいゝゝちゝ実のゝ陸りての秋ゝ此あのゝりゝと
まかりゝゝにお菜のの色まゞ浄くもゝゝゝゝゝけをんて此
あゝよみてゝたゝりゝ　　近代右のあやいゝちぎこ

うちつをゝちゞゝゝもあゝりみゝ帰ぬしあきゝ宿ハ色ゝゝりゝと
○亭主ガナクナラレタレバ　在ノ紅葉サヘ　ホツコリトシタ色ガナイワイ　ソレ
ユエ此紅葉ヲ入タレバ　俄ニアドウヤラ代原ガサビシウ見ハル、ヿカナ
在原ハ代ゝの紅葉のみゝりその又代とこの反新ゝの代
りゝ成きゝてゝゝ　　つゝゆき
ほゝゝぎゝけさ初く彩ふ初ゝゝ代ふゞ代ハ男ふゝ代ふ代ゝ代ふゞあゝりきる
○ケサ　郭公ノナク声ニビツクリシテ　目ガサメテ見ラテ見ハ　アヽモウ
郭公ガナケバ　去年君ニハナレタ代ふゞデサ　オヂヤルワイ
桜をゝ名ゝくゝりゝふやゝゝゝく花ゝ代ぬゞきゝ代ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ人ゝ有ゝふゝ代ゝゝの花をゝてゝゝ

ふるさとも人〻とてはづかしかりふるれいづくをこゝろ忘れしらん

きのもちゆき

○梅をハキツウ早ウ知テ人カナイ松ヂヤガソレヨリサキウ天人ガサハカナウツタワイ

ア、全ク名ナ世中ヂヤ　花ト人トドチラガサキ〳〵アダニナウテ色ヲアラウトヒラツタ

いやウニ花ヨリサキウ天人ガアダニナツテ色ニカラウトハサク〳〵友ニモ見ハナニダ丁ヂヤ

あるじみまちふけるこの人のあと梅花をそとなる

ばしゆきさ

名も色もむかしのこゝろ忘ぬ人の新ど色ハ武人

○梅ノ花ヲ見バ色モ香モ〻〻カタノ濃サニカハラズ同ジヤウニ咲テ居ルコトナレドモ　今年ハウエタ亭主ガ居ラレヌユヱ　ハ花ヲアルニツケテモウエテヒサウニラレタ亭主ノ面影ガサセイ

何ホの花のおもかゝまちぬのこゝろ忘ぬ人ハ

ふまかりてをりに花やゆゑしらをとりのさア

をたくもりりをとんくゝ

君ゆゑ　ゆ　ゆ　ゆ

まだ[illegible]ちんぜんいとまごくあるとうけ
をうえてもやくそこふかり待ばむ[illegible]ばおりひやと
てよみ[illegible]
みたるはあるとき
君ぐう名一むもも記出のまりの志ぎき平べもかりおりるかな

○君ノウエテオカセラレタ タツタ一ムラノ為ガ シゲウナリテ 虫ノシゲウナク
野ニアル ナツタワイ サテモ〳〵ケシカラヌアレヤウカナ
こもあるみこのぢの作りりむ此ふりりむこ〳〵
どもしもひりれバかきておりきるもくふしみて
かけりけ法
やもものり
おとなり〳〵バ子の松さへもきえれむえれば後の〳〵記きりりと

○我父ハトテモ死ナレ、ナラバ ヨシテオカレタ方ニデモ ミナイツシヨニ イツ
ソ消テシマヘバヨイニ ナマナカニ此ガ残ツテアツテ 跡ガアレバ 一シホ
思ヒダサレテ イヨ〳〵カナシサガマスワイ
影ふ〳〵び
よみびとふ〳〵び
なる記人のやどにうよりで影ふかるく行ふのこ〳〵めくとつどるむ

○郭公ハ死ンダ人ノ居ルホトヘカヨフモノヂヤトニテヂヤガ イヨ〳〵サウナ
ラバ コレヤ郭公ヨ オレガジヤウヂウ申フテ泣テバツカリ居ルトニヨ アチ
ヘシラシテクレカシ 又かけてハ イヒダシテ
なるとえよ〳〵記さを海〳〵むふ申のたつやとも〳〵めりふしあと

○此あの此記ハタニ人ヨトテ候タヤラ 亭主ハ死ナレテ家モアレテ 此をハモ

ハヤ今デハ　里をイヤノヤウニナツテシマウタ物ヲ　花ガ咲タトテタレガアヤウ
おすゝ小三位の白と火義のりゝ　ノモトヘタエズカヨヒ　ふさゝゝりきるをいくだく
武蔵てみこ宗流のおれこ
もゝ行で女みこのみゝ　カノミ　かりふる時ふれみこのもこる
性のうゝびゝの初ふふく　ふゝとゆひつをこうけるをとりて見
きばむゝれよふてけさうをねむる紀つけうゝ
かゝゝふあゝとをれぬものゝばゝ山のあゝとあれゝゝ見よ

○山深切ニ思ヒテワタシガ一ヲ山忘レトサレヌモノナラバ　山ヘタチヽスあヲアハレトハ思ヒテゴラウジテトサリヽセ　山ノ庭ガワタシガ煙ニナリヽシタ沢ノユカリデゴザリヽスルホドニ　おすゝかゝゝふのほゝろし

をゝこの人乃他ふまかりゝるゝふ女ふをゝふやまひ
とゝてゝゝとゝゝりにける時よみおきてみまか
つゝふゝる　よみ人しらず
あをゝゝふきうでかゝゝなまゝもぬきとふ神ひ君でかゝゝき

○追付糸ヘ山カヘリナサウタラ　ワタシハモウ今度死ンデシマウテ居モセヌ床ヘ
オヒトリサビシウ山寝ナルデアラウト　存ジヽスレバ　オヽヘノ山あメラサヘエキカズニ
ワカレテ死ニスルワタシガ魂ヨリモ　オヽヘガサワシヤオイトシイ

やまひかゝとゝひゝゝる秋ぎゝちの白のしゝげる
くあゝがえゝれバゝみて人のゝゝにつゝゝをる

大江ゝる里

りみぢ葉を風ふまうせてゐるまうむきうきの八分ありうと

○紅葉ヲ風ノフクナリニシテオイテんルヨリモ　ヒダハカナイ　ハワシ

が今テコサルワイ　モウ〳〵カウヤス今モシレニセヌ

みまかりぬひしてよりる　夜ふこれりを

ゑをるみどうぐ形〳〵おし思ひりむ多もまふおるぬとりを

○ヒゴロ考ヲハカナイ　ハデヤトハナゼ呂フタ〜ヤラ　ハカナイノハ考バカリデハ考イ

サウ呂フタオレガ身モ　考ノヤウニ考ノ紫ニオカヌトネバカリテコソアレ　今

消ウモシレ子バ　考トナンニモカハル〜ハナイニ

やまひしてよりる〳〵なりふりる門よりる

なりひしの知た

きひふゆ〳〵そ〳〵はうひて半〜かぐ飛りりとハおりそざりしを

○死ンデテ道ハ　タレデモ　イツゾハゼヒニユク呂ゼヤトネ〜ハ　カ子ぐすテ居テ

ヨウガテンシテ居タケレモ　ソレデモムヤウニモウ今日カ明日ユカウ〜トハ呂ナダニ

ハやき門呂ガキタツテ死ナ子バナラヌ〜カヤ　ひま秋云ハ今傷佛ろこのさ〜ヨ

今のありのまに〜ぬ〜ぬ〜ぬ

○甲斐ヲ（糸ルヽ旅ヲ　ツイカリフメナ　往来デヤトサ　存ジテ　公テ　こし
糸リマシタガ　ちゃ　ガモハヤ　此世ノイトマゴヒノ門出デコザリマシタワイナ

主従五の走行程